



寺報

2020年(令和2年)

No. 290

1月号

Zenkyo-ji monthly
Communications Paper
En [えん]

縁

七高僧シリーズ その1

紀元前150~250年頃(日本は弥生文化、卑弥呼の時代) 南インド出身

著作:『十住毘婆沙論』の「易行品」

特色:仏道を難行道と易行道に分け、易行である阿弥陀如来のみ名をとなえる道をすすめた。(難易二道)

略伝

少年の頃より学問に通じ、空(くう)の思想を大成。「易行品(いぎょうほん)」を著し、阿弥陀仏の本願による救済を説き、浄土教の祖といわれます。

七高僧の初祖龍樹は、インド名をナーガルジュナといいます。第二の釈尊ともいわれる、大乗仏教の大成者で、昔から「八宗の祖師」とたたえられ大乗の各宗から敬まわれています。龍樹は南インドに生まれ、若くして哲学・天文・地理・医学などのあらゆる学芸を身につけたと伝えられています。

彼の出家について、次のような話しが伝わっています。若い龍樹はあるとき親友三人と語り合った末、「お互い学問は学び尽くしたし諸芸にも達した。これからは人間の歡樂の頂上をきわめ、楽しもうではないか」と決めました。四人は仙人について隠身の術を学び、夜ごとに王宮に忍び込んでは、後宮の美女を心のままに情欲の犠牲としたのです。当然、城中は大騒ぎとなりました。

「隠身術者の仕業に違いない。すぐに城門を閉めよ」

兵士たちは刀剣を振るって縦横にあたりかまわず切り払いました。これでは隠身の術も効き目がありません。たちまち三人の友は切り殺されてしまいました。龍樹はすばやく王の脇に身をひそめたので、危うく剣難を免れます。友の惨死を目のあたりにした龍樹は、情欲こそ堕落の道、災いの根源であることを痛切に感じ、ついに出家を志す身となったといいます。

龍樹は当時インドで広く行われていた小乗仏教を学び、わずか90日ですべてを習得したと伝えられています。その後、雪山(ヒマラヤ)に入って大乗の法を研修し、すべてのとらわれを超えた「空」の真理を体得したのです。龍樹は、仏法の中に大乗無上の法を見いだし、これを弘めることに心を尽くし、人々から菩薩とうやまわれました。

伝記によると龍樹は大乗仏教を広めようとするあまり、異教徒の迫害にあって殉教したともいわれ、また一説には、命終を知って一室にこもり、後日、弟子が部屋の扉を開けて中をうかがったとき、龍樹はすでに示寂していたともいわれています。あるいは600年もの間、生き続けて大乗仏教を宣揚したとも伝えられます。その偉大な大乗仏教の功労者であった龍樹の心には、常に浄土があったといわれます。阿弥陀如来を師と仰ぎ、いつも往生極楽を願っていました。親鸞聖人が七高僧の初祖と崇められたゆえんです。



本堂の御本尊さまにも参拝しましよう」と、申し上げてきました
が、これでお参りし易くなるかな…。

令和二年も健康な日々が送れますよう、益々精進して参りますね。

一念発起し、暴飲暴食は控え、ウォーキング・ヨガ・ストレッチを日課に。お陰さまで、肩こり腰痛は愈え、体重も軽くなり、健康な毎日を送れるようになりはじめた、令和元年でした。話は変わり、一つ報告ですが、現在、境内地の整備をしております。本堂から墓苑への参道の整備。「墓苑へお参りされたら、

とか痛みは消えました。
と腰痛の日々。それに伴い身体のキレは衰え。加えて、今年の三月には、肩の激痛。整形外科で診てもらいますと、肩甲骨裏の第三肋骨の骨折と診断。原因は不明。病院の先生曰、「一年齢のせいやろうね」とのこと。寝返りをうつたり咳をしても痛む毎日でしたが、日にちが薬のごとく、いつの間にか痛みは消えました。

住職レター
ありました。
年齢と共に、メタボリックでお腹は出て、肩こりと腰痛の日々。それに伴い身体のキレは衰え。加えて、今年の三月には、肩の激痛。整形外科で診てもらいますと、肩甲骨裏の第三肋骨の骨折と診断。原因は不明。病院の先生曰、「一年齢のせいやろうね」とのこと。寝返りをうつたり咳をしても痛む毎日でしたが、日にちが薬のごとく、いつの間にか痛みは消えました。

年末を迎えて、この寺報を作成しながら、心静かに今年を振り返っております。私が考える今年の漢字は『健』。改めて健康の有り難さを実感した一年であります。